

# 日本の浮浪者大杉榮

新明正道

大杉榮氏は生前直接の交際なく、従つて茲に追想して述ぶべきことなし。乏しき追想を述べんよりは、他の詳しき豐富なる追想を聞かんことを欲するのみ。されど強ひて余に余の考ふる大杉氏の畫像を示せしならば、余は稀薄にして断片的なる印象よりして、多少の結構を作り得べし。左はそのデッサンなり。

一、大杉氏の肖像を畫かんとするものは、英雄心的傾向を放棄すべし。何故ならば、然らずとも筆者は多少の英雄心を無意識に營み居ればなり。

二、場面は、『獄中記』によるを可きす。同書は袖珍なれど氏の面目を最も良く表はし盡せり。『自叙傳』も亦好資料たらんもこは文辭に於いて『獄中記』に劣るのみならず、稍々筆端奔放に過ぎて、エゴラトリーに趨りし點なきにしも非ず。但し、偉れたる運動家は多少のエゴラトリーを有するものにして、大杉氏も亦然りき。この意味においては、『自叙傳』も亦教ふるどころあるべきなり。

三、顔面には、多分の惡戯氣を出さざれば、失敗なり。同氏においては、惡戯が運動なるか、運動が惡戯なるか分らざるほど、兩者は互に絡み合へり。この惡戯氣は、クロボトキン、否、バクーニンにもなきことにして、蓋し同氏獨特の味なるべし。余は、その惡戯氣を、必ずしも非難するものに非ず。

四、理智家といふよりは感情家の型、彼の世間に發表せし嘲罵の文をみよ。言句の間には、抑へんことも抑へ得ざる多量の感情が、シガーの煙の如くに蒸散しつゝ、あるを見るべし。彼の言句は感情の凝塊なり。此の故に、余は、同氏の文章を以て論理冷徹と評するもの、眼識を疑ふ。同氏には冷徹はなし、熱焔はこれあり。彼の肥えたる顔面はあくまで黄赤を以て塗るべし。

五、勉強家、又は思想家として彼を講ぐべきか。若し可能ならば試むるも可なり。彼は、かなりの勉強家なりしなり。兵馬空聴、しかも莫大の著作あり。元より翻譯その大部分を占むる雖も、翻譯そのことさへ、よほぎの事業なり。彼は若し自己の研究に必要な場合には潔よく末輩又は流派を異にする學者に問ふて恥ぢず。この點潔癖性なきは、眞に勉強家の典型ならむ智識の窓を廣く開かずしては、勉強の大成を期すべからず。思想一斑については、よろしく森戸の追懷文によるべし。

六、出来るだけ、人間として描くべし。同氏は要するに、人間なり。人間としてみれば、缺點もあり、長所もあるなり。誰だか同氏は見榮坊なりと評せり。或ひは然らむ。されど世に見榮坊ならざるもの何ぞそれ鮮きや。余自らも『自叙傳』のなかにて同氏が特に自己の幼少なる時、かなり殺伐なりしことを或る程度の自慢を以て回想しあるをみて、不快に感じたり。されど、されば以て彼を以て殺伐一遍の人間とするは酷に失す。彼は優しき一面を有す。武骨稜々たる柔道家が案外好人物なるが如し。もし彼を適當に人間として見てゐたならば、彼はさまで嫌ふことも、さまで理想化することもなかりしなるべし。畑人をみず、英雄をみる本人にまつては、有難きことかも知れず、されど、彼を兇刃に燈したる甘粕某も、彼を個人とみず、英雄——反對側の——とみたるものなり。英雄とみらるゝことは、本人にまつても、決して有難い許りのものには非ざるべし。若し余に、同氏の墓銘を徵するものあらば余は、アナトール、フランスのある作に出てくる人物のそれの如く、大杉榮——日本の浮浪者、なる九字を選ぶに敢て躊躇せざるべし。

火の如き革命家の熱情に觸れよ！

クロボトキン著  
大杉榮譯

青年に訴ふ

— 定價十錢 —

東京本郷區駒込片町十五

労働運動社發行

# 大杉も知らずに死んだこと

加藤 一夫

僕が小田原在の網一色に住んで居た時分、鎌倉(或は逗子)に居た大杉君一家のものが、僕のミころへ遊びに来た事があつた。當時は大杉君が勞働運動の週刊を出して居た時分のミこで、運動上にも、思想上にも、非常な努力を活躍ミを見せて居たが、かうして野枝さんやまこちゃんや、それから野枝さんの先きの子であるまあちゃんなどをつれて遊びに来るミ云つたやうな場合の大杉君は全く人の好いお父さんだつた。

僕等は僕のあばら家の二階で、(しかしそれは素敵に見晴しのいい、氣持のいい二階だつた)サイダアやビールを飲みながら話し合つた。大杉君はサイダア、僕ミ野枝さんミ僕の妻はビール、そして子供達には花火をあてがつておいた。

その時どんな事を話し合つたか、もう覚えて居ない、たゞ、僕は東京の家を若い主義者達にあらされたミこ、大杉君は勞働の事務所をさうした人々に襲撃されて辨當代だけでも並大抵でない、それはまだよいミして、泊り込まれるのが一番閉口だミ云つたやうなミこを話し合つたミこ位が思ひ出される。

そこでも僕は、大杉君には矢張り、人間らしい親しみ易い男だミ云ふ感じを與へられた。

その時分しかし大分景氣がよかつた。小田原におりるミ直ぐ自動車に乗つて僕のミころにやつて来て、歸るミきも自動車で歸つて行つた。

後で新聞を見るミ、大杉君が僕のミころへやつて来たミ大袈裟に書いて、自動車賃を拂ふのに百圓札を出したミ云ふミこが珍らしけに書いて居た。

それがまた大杉君の名を湘南地方の人々の胸に刻み込むのに非常に役つた。僕の尾行が後で、『大杉君は随分金まはりがいんですね』ミ馬鹿に感心して居た。ミころが、こゝに一つ一つ、大杉君の知らなかつた、それから後ち會つたら話して見よう

ミ思ひながら、つひ忘れてばかり、死ぬまで話さなかつた一事がある。

それは、後から僕の專屬になつた尾行の一人が、その時、自動車の運轉手になりすまして、ナポレオン帽みた様な帽子を被つて運轉手臺に乗り込んで、ひそかに大杉夫妻の談話を盗みぎゝして居たミこだ。

それは僕も知らなかつたのだ、後からその尾行からきいた話だ。

『あのミき運轉手臺に背の高い男が居たでせう、あれが私でした』ミ彼は云つた。  
大杉君も恐らくそれには氣がつかなかつたらう。

## 牢屋の歌

榮

魔子よ、魔子よ、

ババは今

世界に名高い

バリの牢やラ、サンテロ。

だが、魔子よ、心配するな

西洋料理の御馳走たべて

チヨコレトなめて

葉巻スバくソフアの上に。

そして此の

牢やお蔭で

喜べ、魔子よ

ババは直ぐ歸る。

おみやげさつさり、うんこしよ

お菓子におべべにキスにキス

踊つて待てよ

魔子よ、魔子、魔子、

『日本脱出記』より

## 追憶断片

林倭衛君の一章を除くほかは全部、改造第五卷第十一號からの抜き書きであるこゝを、お断りしてをきます。

私が追悼號のやうなものを出すつもりでゐた頃、集つた原稿だけでは少々貧弱だつたので、それを補ふために此の切り抜きをしようと思つてゐた、それをそのまま、大串君の雑誌の上に試みましたが、分勝手な切り抜き方をしたこゝを筆者諸君に改造社にお断りしてをかなければなりません。

—安谷 生—

林 倭 衛

モンマントルの斯うした盛場は、夜の深けるにつれて、いよくその不夜城たるこゝろを發揮してくる。こゝでは十二時は宵のうちだ。徹夜の踊場は漸く十二時頃になつて燈を一層明るくするのだ。それまではたゞ通りいつべんのモンマルトル見物者の群で賑はふのだが、それが散つて仕舞つた後から明け方へかけた雰圍氣こそ、こゝの本領なんだろう。

晝間、彼（大杉）は大抵室に引込んでゐた。何にをしてゐたかよく知らないが、窓から戸外の通りを眺めてゐるこゝろ

いぞ可厭な顔を見せるこゝろがなかつた。そして何時までもおつき合をしてゐた。斯うしてカフェを渡り歩いてゐる間、彼はカフェを飲んでゐたんだが、あんなものをよくもあ、飲めるも呆される程、いく杯でもお替りをしてゐた。一軒の店で二杯三杯飲むのは珍らしくなかつた。それを二軒も三軒もやるのだから驚いた。尤も僕の呑む酒のこゝろを思へば別に不思議もないんだが、ものがコーヒーだけに目に立つた。そのカフェの中にコニヤックを入れるさうまい云つて、ほんの少量づゝ入れてゐた。時々それが過ぎるさう胸の動悸が激しくなつた云つて、大きな眼玉をギョロ／＼さして、フウ／＼云つて赫い顔をしてゐるさうな事もあつた。そんな時には往來の淫實共にも何に彼を揶揄つてゐたようだ。

ある時カフェに坐り込んでゐるこゝろへ、僕を知つてゐる女が這入つて來た。女はべたりと坐り込んで中々動きさうもない。こつちも退屈してゐた時なんで、その儘相手になつてゐるさ、女が大杉の腕時計に目をつけて、ちよいと借して呉れ云つて自分の腕に巻きつけた。その時計は彼がこの前上海土産に野枝さんへ買つて行つたものを、今度くる時借りて來たんだと話してゐる小さな金時計だ。その内に女が時計を呉れ云ひ出した。僕は冗談に云つてゐるものと思つてゐたら、大杉は、そんなに欲しければ與るよ云ふのだ。よせよ也莫迦ばかりいぢやないか、夫れに君のぢやない云つて居

ない云ふようなこゝろを話してゐた。それは多分その邊にウロつてゐた女の容子でも見てゐるものだろう。尤も夜が遅いので起きるのは十二時頃だつたろう。場所柄だけにさうしても早寝は出来なかつた。昨夜はさう／＼この本を讀んでしまつたよ、なご、眼を眞赤にしてゐるさうなこゝろもあつた。

僕は久し振りに巴里に出たので、當座は早く起きて、用達や友達に會ひに出掛けて、晝は殆んど宿に居なかつた。夜は彼と一緒に飯を喰ふ筈にしてその時刻には都合して宿へかへるさうにしてゐた。僕の歸りが遅れるさうなこゝろがあれば、彼はひみりで飯に行き、その後をカフェの梯子をやり乍ら散歩したようだ。それにしても十二時頃には必らず宿へ一度かへつて、僕のかへるを待つか、或は僕が寝て了つてゐるのを起して、もう一度出ようなき、引張り出すのが常だつた。

まるで地廻りのさうな恰好でふたり連れ立つて、モンマルトルからグラン・ブウルヴァルへかけてカフェを渡り歩いた大方々々のカフェやそこらへ出入りしてゐる女たちと顔馴染になつた彼は元來酒が飲めなかつた。酒の飲めない彼も、酒なしで居られない僕と一緒に歩いてゐるのだから妙だが、彼は酒呑みを相手にしてゐても一向平氣のようだつた。却つてそんな場合には愉快さうに見えた。

僕がはめをはずして、だら／＼いつまで飲んで居ても、つ

るではないか僕がさめるさ、何あに、歸つてから訊かれたら紛失した云へばい、ささその儘女に與つて仕舞つた。女は寧ろ意外に思つたらう、それを貰ふさつきさき出で行つて了つた。彼はそれから歸るまで時計がなかつた。（改造一六—六）

（大杉は上海から其の代りの時計を買つてかへつて野枝さんに渡してゐた。前の時計は林の戀人にやつたのだ云つてゐるが、野枝さんはぐちつてゐた—安谷—）

安 成 一 郎

山川君が荒畑が雑誌『青服』の出版法違反の下獄から出て來たさき、出迎ひに行つた私は、久しぶりで大杉に出逢つた。そして私達は連れ立つて、上駒込の彼の家に出かけた。それは田端で火事に遭つて引越した家であつた。大杉は道々その火事の話をした。彼はその晩、變な友人と銀座で逢つて、一緒に吉原へ遊びに行つたのであつた。銀座へ行くさき尾行をまいて仕舞つたので、途中淺草の黒瀬春吉君のこゝろへ行つて、その尾行に吉原の何かいふ家に案内をして貰つたのだが、夜中になつて、揺り起された。象潟署の高等視察がやつて來たのである。大杉は取次きから其の名刺を受取るさ、わざとびつくりしたやうにぶる／＼顫えながら女に抱きつい





気が變になるまで胸がワクワクした。次ぎから次ぎへいろいろな思ひ出やら想像やらが車の輪のやうに急轉した。

一座はしんみして聲を出すものもなかつた。それ／＼の思ひ出にふけてゐるらしい。

子供達はついで見た事もないおばさんだまゝいふ様な顔をして私を珍らしさうに見てゐたが、親戚のおぢさんの注意で一番上の子が私にお辭儀をした。そしてお骨に向かつておじぎをする。そんな事を繰返しく／＼幾度もやる。それをみた外の妹達も同じ様にやるので、一座の人々を涙の中に笑はせた。私はかうした子供達の頑是ない無邪氣さに打たれて、人がるなかつたら引よせて思ふ存分泣いてみたかつた。

（大杉は僕の二階棲居に来てゐた時、なにかの話のついでに、監獄の中では伊藤のこゝより前の女房（保子さん）のこゝばかりが頭に浮んで来る、と云つてゐた。―編者―）

土 岐 善 磨

大杉が憲兵や刑事につかまへられた時、洋装の妻と甥と並んであるきながら、果物店でいくつかの梨子を買ひ求め、それをバスケットに入れて持つたまま、留置されたまゝいふが、やがて不意の暴力に逢ふ前、憲兵からナイフを借りて、梨子をむいて喰つたまゝいふ事實の傳へられたのも大杉らしい。あ、

いふ時變に、あ、いふまゝこゝろへ連れこまれるまゝは、大杉はすつかりなれてゐたのであらうが、いかにナンでも後ろからしめ殺されやうまゝは思ひ設けなかつたであらうが、社會思想家としての大杉の最後の場面に、この梨子の點出されたまゝは、たまたまかれの性情や生活氣分の表徴のやうな氣がしてならない。

馬 場 孤 蝶

大杉君は憐みの心の深い人であつた。僕のうちの猫が生んだ二番仔が一番仔に頭を手玉にされて、眼を爪で引つ搔かれて盲になつてしまつた。その旨の仔猫が見えぬ眼を上向けて見張るやうにして、二階の僕の部屋へ這入つて来るまゝ、來合せてゐた大杉君は、仔猫の傍へ顔を寄せて、

『貴様は可愛いさうだなア』と云つてから、直ぐ『さア來い、來い』と、お召の着物の膝を叩いた。

或る時に、ゾラの『ジャアマナル』のなかの罷工職夫の群へ兵士が發砲する條下の話をするまゝ、

『私まもはあ、いふのを見るま、ひびく凄惨なる心持ちがします。あ、いふのを見るま、大罷工まきは濫りに起すべきものではなまゝ思ひます』と大杉君は沈んだ聲で云つた。

原敬氏が刺された時分、大杉君は鴉沼の東屋にゐたさうなのだが、同じ旅屋にゐた若い知人の部屋へ來て、

『原首相が暗殺されたまゝいふ話だから、今尾行を號外を買ひに藤澤へやつた。號外が來たら見せよう』と云ひ、それから少したつて、『斯ういふんだ』と云つて號外を見せに來たのみで何一言も云はなかつた。

『自分の氣のせえかも知れぬが、大杉君は確に憂色を帯びてゐたやうであつた』と、その若い知人は云つてゐる。

思慮のある、且憐愍の心の深い大杉君は、今度の變災を見て天災だまゝは、思ひはしなかつたらう。富が平均して面白いまゝは思ひはしなかつたらう。

内田魯庵氏の書かれたまゝこゝろによるまゝ、大杉君は大震災後は毎月末の幼児を乳母車に乗せて、子守りばかりをしてゐたまゝいふ、知らず、斯の温情の好漢の胸には、變災で死ぬる、變災で苦しめる幾十萬の犠牲者に對する堪えがたき憐れみの念が往來してゐたのではなからうか。

（原敬が殺されたまゝ云ふ號外を見て大杉が憂ひ顔をしたのは本當だまゝ思はれるが、それは、その暗殺者に思ひ當りがあつたためだまゝ思ふ。―安谷―）

宮 島 資 夫

アルテババーセフの作品、勞働者セイリオフが、初めて翻譯された時、近代思想に寄贈されたその書物を讀んでしまふまゝ『面白い本だ讀んで見給へ』と云つてその本を僕に貸してくれた。そして僕がまたそれを讀了して返しに行つたまゝ、

『さうだ君痛快な書物だらう。セイリオフの最後は全く羨しいね』と云つてニコリと笑つた。劇場の中まで追いつめられて、反逆の血の燃え切つたセイリオフは、携へてゐたピストルを亂射した揚句に、遂に警官の手に捕えられた。そのまゝに彼の眼の中で光つた冷かな、無關心にも似た眼まゝの姿は長く僕の心の中にいりつゝいてゐた。セイリオフの死を喜んだ大杉君は、大地震の災害を背景に、乾燥無味な落莫とした憲兵司令部の一室で、ピストルを亂射する隙もなく、甘粕の腕で咽喉を絞められてしまつたのだ。その時の彼の眼はまゝんな光を放つたまゝであらうか、色々の事を僕は想像する

まゝらかまゝ云へば、その本質は人懐い人であつた。たゞあれだけに何か仕事をしたまゝ云ふ要求が強かつた爲に、仕事の爲にそれ等の感情が邪魔になつて捨てよう捨てようまゝ努めてゐたまゝにも思はれる。これは大杉君ばかりでなく、僕の周圍の友人の多くに見受ける現象である。が、いつか保子さんまゝ別れ、皆なが獨立した生活を送るまゝ云ひ出したその理想を實現させる爲か、麴町の第一福四萬館に來てゐた時に、或

る夕方、尋ねて行くミ、丁度大杉君は不在だったので、僕は家に歸つてしまつた。するミスぐそのあきから、——何故待つてゐてくれなかつたか、此頃は一人きりで仕事をしてゐるので淋しくつて仕方がない——ミいやに涙つほい端書を寄越した。その時分に大杉君は、

『自分は酒を呑まないから、悪友ミ云ふ者がない。お互ひに弱點を許し合つた悪友でなければしみじみした話は出來ない。さうかしてもう少し酒が呑めるようになりたいたミ云つて僕が行くミ、無理に少しづつ、でも酒を呑む事を努めてゐたその頃は一合以上呑めるようになったようだが、それから以後はまた段々呑まなくなつて、もこの黙阿彌になつてゐたらしい。

(そのもこの黙阿彌がフランスで修業してアドウ酒やウイスキーのようものが少々呑めるようになってゐた。——安谷——

文明批評社事務所

大阪市住吉區住吉町一六七  
堺市安井町一六五  
大阪府南河内郡新堂村字新堂

翻譯・文案・圖案・速記  
新聞通信・經濟調查

神戸 翻案社

神戸市板宿大田町二丁目一三  
振替口座大阪三七〇三〇番

労働問題

小作問題

借家問題

人事一般

相談所

午前九時迄  
午後七時より  
日曜祭日此限  
りにあらず

堺市安井町一六五  
大阪市住吉區住吉町一六七  
大阪府南河内郡新堂村字新堂